

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

62

ふと自分が歩いてきた道を振り返り、生まれ育った「場所」へ帰ってみた。今はもうなくなってしまう五葉山麓の「実家」は、上有住五葉地区。五葉山登山の入り口の集落松山から、さらに奥にあった。

自然に抱かれ、とっぴりと浸かった生活。律動的に聞こえる溪流の音、寒さに耐えじつと春を待つ木々、薄く柔らかないぼれそうな小さな葉の新緑、小鳥のさえずり、セミの大合唱、突然訪れる夕立、カラカラと舞う枯葉、これらすべてが五葉山麓の季節の彩りであった。

雪深い冬の道を五葉小学校へ通う。膝の高さだけではなく、時には腰近くまで積もることもあった。学校までは四キロ以上あり、春、夏、秋には約一時間、冬場は時にはその二倍もかかることがある。

雪は道に積もるだけでなく、家の中まで入り込んでくる。朝起きると板場がうっすらと雪で覆われていることも珍しいことではなかった。

五葉山に初めて登ったのは中学生の頃で、以来何度も松山側から登った。釜石側から初めて登ったのは十八歳の夏だった。

たのは十八歳の夏だった。家から中卒（なかぞね）のバス停までは徒歩で、中卒からは国鉄バスで上有住駅へ。ここから釜石行きの列車に乗り、洞泉駅で下車した。

今思うと大松コースか、って行くと、やがてゆつたりと広がる頂上部へ出た。歩き始めてから六時間以上がたっていたのかもしれない。

「母ちゃん、山さ行ってくっからよ」
「五葉さがあ。氣いつけてな。明るいうちに帰ってこいよ」
おにぎり二つを持ってゴム靴で、走り出すように家を後にしたことを思い出していた。

「明るいうちに帰ってこいよ」

住田町世田米 千葉 ヤツヨ

ら登ったのだろう。洞泉駅から釜石に向けて歩き、甲子川に架かる五葉橋を渡ると、左手に大松小学校が見えてきた。ここから森へと分け入って行く。

大人二人が腕を回しても届かないほどの大きな木に圧倒される。すがすがしい冷気を漂わせる桶ヶ沢、水無沢を通過して登

あの時五葉山はそう語りかけていたように思う。自分をしっかりと抱きかかえ、励ましてくれたのだ。苦しかったとき、悲しかったとき、む

終戦直後に生まれた私にとつて、幼かった頃、食べるもの、着るものも、履くものも決して恵まれてはいなかった。否、私だけでなく時代がそうであった。

今は車があり、立派な家があり、電話やテレビがある満ち足りた時代だ。それでも何かが足りない。便利さを手に入

れ、無駄を排して効率化を進めて得たものの代償に、いたわりや思いやり、の気持ちを忘れ、失いかけているのではないかとと思う。

手間ひまかけてこそ得られるもの、無駄なような営みの中にも確かな価値があることを、無数の生命が宿るふるさとの山々は教える。

「明るいうちに帰ってこいよ」——今はもういない母の声を登山のたびに思い出す。自然の中で生かされてきたことに感謝したい。ふるさとの自然がいつも私の心を清めてくれる。
【執筆者プロファイル】一九四五年生まれ、住田町世田米在住。主婦。



2000年の元日登山。シャクナゲ山荘前で(右が筆者)

エッセイ